

第6章

さらなる授業改善に向けて



第6章 さらなる授業改善に向けて

教養教育改善充実特別事業作業班

班長 小田隆治

(1) 個々の教員の過去のFD活動への参加度調査

平成12年度から本格的に取り組んできた山形大学教養教育のFD活動も本年で5年目となった。全国的に見ても、驚くほどの進展を見せてきた本取組は、ひとえに「ワークショップ」や「合宿セミナー」、そして「学生と教員による授業改善アンケート」に参加していただいた教員のおかげである。こうした教員の参加なくして、組織的取組としてのFDは成立しない。全国でFD活動が活発だと言われている大学を見ても、FD研修会の参加者は少ないのが実体である。そうした中で、山形大学では分散キャンパスという不利な立地条件にも関わらず、夏に行われる「ワークショップ」には毎年150人から200人の参加者がある。これは全国的に見ても驚嘆すべき参加者数なのである。

各種研修会には常にポストアンケートを実施し、研修会に参加した教員の意見をフィードバックして、次年度のFD活動の改善資料としている。また、「学生による授業評価アンケート」の結果を見て、授業者からポストアンケートを委員会に戻してもらい、それをこの報告書に掲載することによって、授業改善の資料として全教員への共有化を図っている。また、こうした意見を委員会として次年度以降のFD活動の改善に活用させてもらっている。授業改善は単に委員会が主導するのではなく、全教員の共有化、双方向化を旨として発展している。このように、組織的なFD活動は全教員が参加することを前提として成り立っている。

FD研修会への教員の参加者数や率を他の大学と単純に比較すると、山形大学のFDが非常に活発であると断言できる。しかし、山形大学においても、これまで5年間実施してきたFD活動にまったく参加していない教員がいることも事実である。本委員会はそのような教員に授業改善に役立ててもらうために、平成15年度に授業改善ハンドブック『あっとおどろく授業改善 - 山形大学実践編 -』を作成し、それを全教員に配布した。このハンドブックは全国の大学にも配布されたが、他大学からも所属する全教員に配布したいとの注文が殺到している。このようにこのハンドブックはFDに役立つとして評価の高い代物である。ところが、このハンドブックが学内でどのくらい授業改善に役立てられているかを調査していない。研修会にもまったく参加しないしハンドブックにも全然目を通してない教員がいるのかもしれない。

FDは組織的な営みである。教育改善や授業改善に積極的な一部の良心的な教員だけでFDが成立することがあってはならない。FDは組織の構成員全員が取り組む

べき営みなのである。そこで、各教員が過去の山形大学のFD活動にどのくらい参加したかを調査しようではないか。問題はこれまでのFD活動に一切参加していない教員である。そうした教員には個人的にどのようにして授業改善を進めているかを示していただき、それが有効な方法ならば全構成員に提示し、共有財産としたい。

(2) 授業改善クリニックの創設

本年度からFD活動を含めた教育改善を持続的に発展させることを目的として、山形大学に高等教育研究企画センターが新設された。現時点ではまだ誕生したばかりで陣容、施設共に脆弱なものであるが、これからの山形大学の教育改善の発展はひとえにこのセンターの発展充実にかかっている。

山形大学のFDによる授業改善システムは、一般的な健康管理システムを使って説明することができる。我々は健康であると思っけても年に一度健康診断を受ける。そこで、高血圧や脂肪肝が指摘されると、食事制限や運動などをして節制に務める。そしてそれが治ったかどうかを再検査で確認する。授業改善においても、「学生による授業評価」で診断を受け、自助努力によって改善していく。そして改善されたかどうかを「学生による授業評価」で確かめることになる。こうしたことの繰り返しによって、継続的に授業は改善されていくことが期待できる。なお、自助努力だけでは授業改善が進まないのだから、ピアレビューとしての「ミニ公開授業&検討会」もこのシステムに組み込んでいる。相互研鑽することによって、より効率的で発展的なものにしていこうとしたのである。

これまでのFD活動から、自助努力や年に一・二度の「ミニ公開授業&検討会」のような相互研鑽だけでは、授業を改善できない教員もいることが分かってきた。そこで、本年度はそのような教員の授業を改善するための方法を研究した。詳細な内容については、第5章を読んでもらいたいが、方法としては毎回筆者が授業を参観し、その後授業者と二人で授業の検討会を行っていった。結論から言うと、授業を改善することはそう簡単なことではない。冷静に判断すると、誰でもが自助努力だけで高血圧や脂肪肝が治るわけではないのと同じである。我々は少し楽観的でありすぎたのかもしれない。しかし、学生側から見ると、きわめて悪い授業をこそ改善して欲しいと願っているのである。また、こうした2・3の授業こそが大学全体の授業の負のイメージを形成している。こうした理由からも、学生に評判の悪い授業は組織的に改善していかなければならないことになる。

では、こうした授業をいかにして改善できるのだろうか。やはりそこは健康管理システムと同じように授業改善のためのクリニックの設置が必要となってくる。このクリニックには授業改善を支援できるプロフェッショ

ナルがいる。こうしたプロは授業改善に困って訪れる教員の相談にのり、その教員の授業を参観して持続的に有効な改善策を講じてくれるのである。授業改善のプロは教員の授業のカルテを作成することにもなるだろう。

では、クリニックをどこに設置し、どこから授業改善のプロフェッショナルを連れてくればいいのかだろうか。クリニックは高等教育研究企画センター内の一部門とするしかないだろう。そして、授業改善のプロは単なる高等教育の研究者ではなく臨床的な実践性を備えた大学教員でなければならない。現実にはそうした教員は学内ばかりでなく全国を探してもどこにもいないので、全国の大学でベスト・ティーチャーに選ばれた授業の上手な教員を採用し、そうした教員を授業改善の研究能力と実践性を備えたプロフェッショナルに育てていかなければならないだろう。この取組は全国どこにも行われていない先進的なものであるが、その必要性を疑うものはほとんどいないであろう。もし、3名の授業改善のプロフェッショナルを組織できれば、山形大学だけではなく他大学・短大の授業改善にも多大な貢献が期待される。単科大学や短大などの規模の小さな大学が自前でこうしたプロフェッショナルを置くことはできない。こうしたことも山形大学の使命であると考えられる。

(3) WebFDの発展充実

今年度、仙道学長の授業を公開し検討会を行ったが、この模様をインターネットでライブ配信した。このことを事前に知らせておいた他大学のFD担当者は、これをコンピュータで見て、その感想を送ってくれた。いずれも高い評価を下している。このライブ配信は遠隔地でのFD活動の支援のためには簡便かつ有効な方法である。これからはこれを発展させていき、山形大学の分散キャンパスに積極的に導入していきたいと考える。しかし、この方法では双方向性が保たれてはいない。こうしたことを解決する手段も講じていかなければならないであろう。

本委員会のホームページ『豊かな授業をめざして - 山形大学による授業改善の取り組み - 』（<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kaizen/ksite/index.html>）は、FDの取組のほとんどを即時に公開している。そのなかには、「授業改善リレーエッセイ」というコーナーがあり、授業改善に取り組む教員のエッセイがリレー式に毎週（現在2週に1回）書き加えられている。ここでは、個々の教員の授業改善のノウハウが示され、他の教員の授業改善に役立っている。このコーナーは授業改善ハンドブック『あっとおどろく授業改善』の続編のような役割も果たしているようである。このコーナーの継続発展をしていかなければならない。

さいごに

授業改善や教育改善には、定期的に過去の活動の点検評価をしていかなければならない。そのためにも、「個々の教員の過去のFD活動への参加度調査」をする時期に来ている。FDに積極的に参加している人たちは、「組織

的な教育改善のためには、参加していない人たちこそが問題である」ということをよく口にする。それはその通りである。過去にまったく参加していない人々には、なぜ参加しなかったのかを聞くことにしよう。また、どんな研修会ならば参加するのかを提案してもらおう。もしかすると素晴らしい提案があるかもしれない。

「授業改善クリニック」は必要である。もし教員の教育評価が現実になった時、個人の努力では授業改善のできない教員をトップが一方向的に評価し、追い込むのは健全な組織がやることではない。そうした教員にも組織的に改善の手を差し伸べる「クリニック」がなければ、評価を押し付けることはできないのだ。誰でもが自分一人で授業改善できるというのは神話でしか過ぎない。現に、一人では健康管理できない人もいないではないか。

授業が個人で行われる限り、つまるところ授業改善は個人的な営為である。FDとは最終的にはこの個人への支援にならざるを得ない。しかし、個人は組織の一員である。決して自分勝手に鎖国を決め込んでいいわけではない。個人が開かれ相互交流がなされない限り、組織としての発展はない。

我々は「学生による授業評価」や各種のFD研修会をこれからも継続していかなければならない。さらにそれに加えて「WebFD」のような新しい方法を採用して、FDをトータルなものとして発展させていかなければならない。いつまでもこれで十分だということはないようだ。